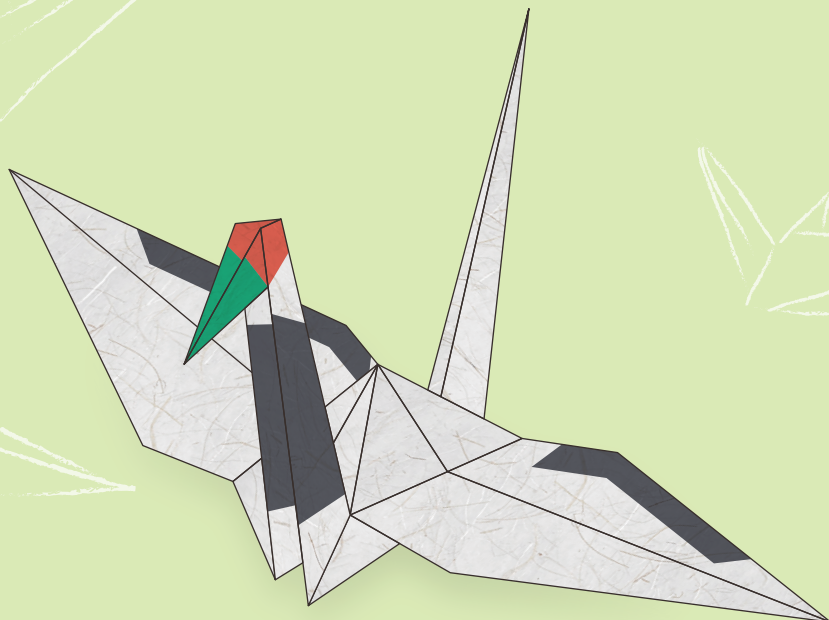


戦後80年 平和コンクール記念誌

繋いで、拓く 知のチカラ

戦後80年



令和7年8月

釧路市平和都市推進委員会

「平和コンクール記念誌」の発行にあたって

戦後 80 年の本年は、旧釧路市が「核兵器廃絶平和都市」を宣言してから 40 年という節目の年でもあります。また、終戦から半世紀を経て広範な市民団体が一丸となって募金活動を行い、平和を願う市民の新たなモニュメントとして栄町平和公園に「平和の祈り」が建立されてから 30 年を迎えるところです。

昭和 20 年 7 月 14 日・15 日の釧路空襲をはじめ、先の大戦で尊い命を数多く失った悲しみを心に刻み、釧路市民は平和を希求し続けてきました。平和は、社会全体が不断の努力を重ねることで実現されているものであり、常にその努力に感謝する姿勢が必要です。

幸福な暮らしの根幹となる平和の大切さを考えてもらう取り組みは、平和事業のひとつとして釧路市平和都市推進委員会が実施してきた平和絵画、平和図書読書感想文、平和の主張の各種コンクールへの参加を通じて、次代を担う子供たちの心に着実に根付いていると感じており、本誌面をお借りして、歴代審査員をはじめ本事業を支えていただいていた皆様に衷心より感謝を申し上げる次第でございます。

本記念誌は、平和絵画コンクールがスタートした平成 13 年以降の各コンクールの最優秀作品を掲載し、過去 10 年間の子供たちの平和への想いをまとめさせていただきました。戦後 80 年にあたり、改めて、その強い思いを市民の皆さんとともに受け止め、恒久平和のために弛まぬ努力を続けていくことを誓い、発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。



釧路市平和都市推進委員会委員長

釧路市長 鶴間 秀典

令和 7 年 8 月

目次

平和絵画コンクール（小学生）

樋渡 俊翔（北海道教育大学附属釧路小学校4年）…	1	村井 咲月（釧路市立愛国小学校4年）…	3
樋渡 俊翔（北海道教育大学附属釧路小学校5年）…	1	須藤 萌衣（釧路市立愛国小学校4年）…	4
仲谷 瑠花（釧路市立中央小学校6年）…	2	黒滝 琴音（釧路市立愛国小学校6年）…	4
阿部 晃大（釧路市立湖畔小学校3年）…	2	柴田 千星（釧路市立愛国小学校3年）…	5
門間 大明（釧路市立湖畔小学校4年）…	3	山本 乃愛（釧路市立湖畔小学校3年）…	5

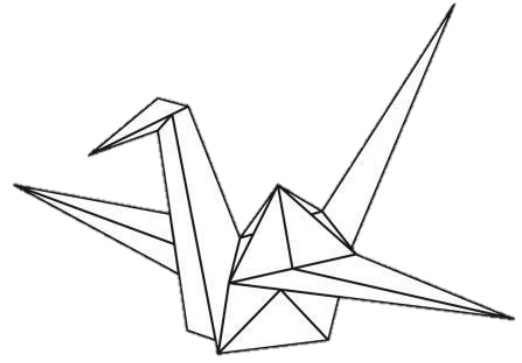
平和図書読書感想文コンクール（中学生）

歴代最優秀受賞者…	6		
戦禍に学ぶ		「戦禍の真実は体験談にあり」	
北海道教育大学附属釧路中学校 2年 樋渡 羽奏…	10	北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 樋渡 俊翔…	17
同じ轍を踏まないために		今の私たちがあるのは…	
北海道教育大学附属釧路中学校 3年 樋渡 羽奏…	12	北海道教育大学附属釧路義務教育学校 8年 青戸 愛唯…	18
私達の未来のために		あの日の空の色	
釧路市立桜が丘中学校 2年中本 紅葉…	13	釧路市立青陵中学校 2年 澁谷 茉奈…	20
明日も		戦争の終り	
北海道教育大学附属釧路中学校 3年 五堂 叶惟…	14	北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 澤谷 彩…	21
燃える広島ので		語り継ぐ惨禍	
釧路市立景雲中学校 2年 高山 果恋…	16	北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 山瀬 一太郎…	22

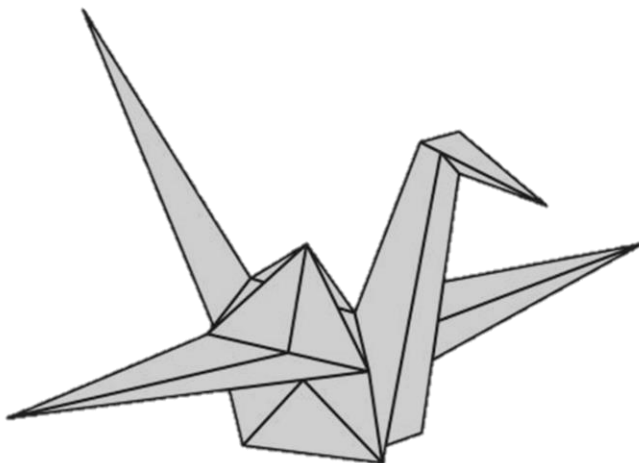
平和の主張コンクール（高校生）

歴代最優秀受賞者…	24		
今を生きる私たちの課題と責任		戦争について考え、理解する	
武修館高等学校 2年 吉田 怜未…	26	北海道釧路江南高等学校 1年 藤澤 輝煌…	32
私が考える平和		戦争のない世界へ	
北海道釧路北陽高等学校 2年 田口 さくら…	27	北海道釧路北陽高等学校 2年 高橋 和花…	33
平和への想い		平和のために	
北海道釧路湖陵高等学校 1年 樋渡 羽奏…	28	北海道釧路北陽高等学校 3年 佐藤 改…	34
我々が堅持すべき平和		祈り続けること	
北海道釧路湖陵高等学校 2年 樋渡 羽奏…	29	北海道釧路湖陵高等学校 1年 青戸 愛唯…	35
時代とともに移りゆく未来		平和のメロディー	
北海道釧路湖陵高等学校 3年 樋渡 羽奏…	31	北海道釧路湖陵高等学校 2年 青戸 愛唯…	36

※全頁を通じて、敬称略とさせていただきます。



平和コンクール
平和絵画コンクール（小学生）



第16回 平成28年度 最優秀賞 樋渡 俊翔（北海道教育大学附属釧路小学校4年）



第17回 平成29年度 最優秀賞 樋渡 俊翔（北海道教育大学附属釧路小学校5年）





第 18 回 平成 30 年度 最優秀賞 仲谷 瑠花（釧路市立中央小学校 6 年）



第 19 回 平成 31 年（令和元年）度 最優秀賞 阿部 晃大（釧路市立湖畔小学校 3 年）



第 20 回 令和 2 年度 最優秀賞 門間 大明（釧路市立湖畔小学校 4 年）



第 21 回 令和 3 年度 最優秀賞 村井 咲月（釧路市立愛国小学校 4 年）

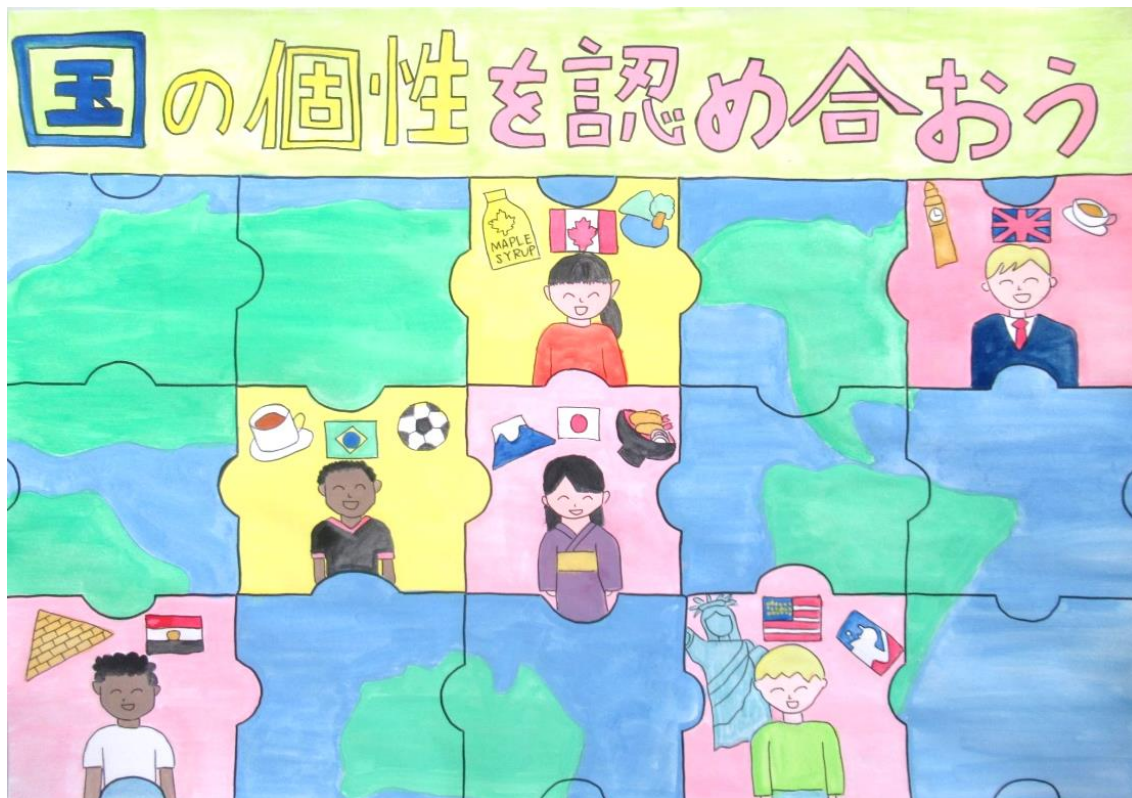




第22回 令和4年度 最優秀賞 須藤 萌衣（釧路市立愛国小学校4年）



第23回 令和5年度 最優秀賞 黒滝 琴音（釧路市立愛国小学校6年）

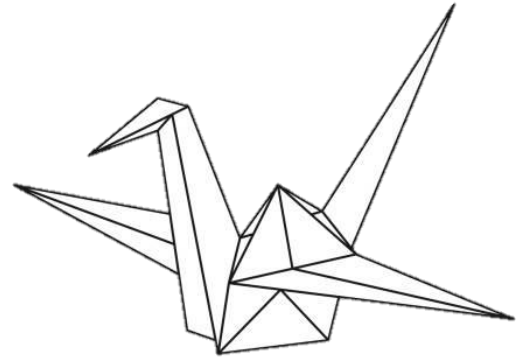


第24回 令和6年度 最優秀賞 柴田 千星（釧路市立愛国小学校3年）

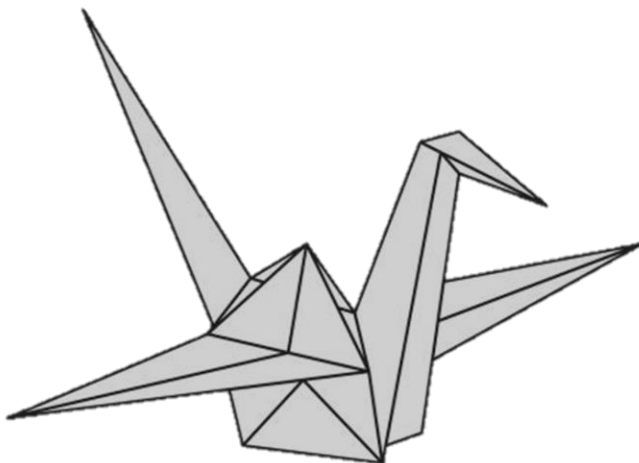


第25回 令和7年度 最優秀賞 山本 乃愛（釧路市立湖畔小学校3年）





平和コンクール
平和読書感想文コンクール（中学生）



歴代最優秀賞受賞者

●昭和63年

第1回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 3年 今井 愛 緒 「二人の墓標」を読んで
 附属釧路中学校
 弥生中学校 3年 臼木 みか 「死の影」を読んで

●平成元年

第2回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 桜が丘中学校 3年 渡辺 聖子 「原子雲の下に生きて」を読んで
 北中学校 2年 三牧 由佳 「唯一の被爆国として」

●平成2年

第3回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 3年 長谷川 綾 「真実の平和を求める」
 附属釧路中学校
 北中学校 3年 西城 琴恵 「いしぶみ」を読んで

●平成3年

第4回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 武佐中学校 3年 小柳 衣恵 「わたしたちがちいさかったときに」
 鳥取中学校 3年 井出 宣久 「原爆詩集」

●平成4年

第5回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 3年 菅野 正之 「碑」
 附属釧路中学校
 鳥取西中学校 3年 武田 佳子 「散っていったつぼみ達一碑一」

●平成5年

第6回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北中学校 3年 三牧 加奈 「心の叫び」
 北海道教育大学 3年 柴田 智里 「「碑」によせて」
 附属釧路中学校

●平成6年

第7回 平和図書読書感想文コンクール



最優秀賞 北海道教育大学 3年 長尾 元嗣 「帰らぬ者の伝言」
附属釧路中学校
東 中 学 校 2年 山田 麻琴 「体験記集14歳の生涯」

●平成7年

第8回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 弥生中学校 2年 川野 智子 「原爆の図物語」
鳥取西中学校 3年 武田 章男 「尊い命 一碑一」

●平成8年

第9回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 東 中 学 校 2年 佐々木澄美 「お母さんの子はみんな集まれ」
北海道教育大学 3年 谷 亮 匡 「「東京が燃えた日」を読んで」
附属釧路中学校

●平成9年

第10回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 2年 楠金 優美 「戦争を知っていますか～お母さん”水”を
附属釧路中学校 ～を読んで」
東 中 学 校 2年 山田 祐嗣 「広島・長崎からの伝言」

●平成10年

第11回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 東 中 学 校 2年 松嶋 志帆 「私の平和の芽～語りつぐ原爆の大切さ～」
北海道教育大学 3年 金澤 尊子 「「折り鶴の子どもたち」を読んで」
附属釧路中学校

●平成11年

第12回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北 中 学 校 3年 斉藤 麻耶 「私達が忘れてはいけないこと
～原爆体験記を読んで～」
武佐中学校 1年 齋藤 優佳 「「平和の芽」を読んで」
北海道教育大学 3年 阿部明日美 「平和の種から芽へ そしてー」
附属釧路中学校

●平成12年

第13回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 武佐中学校 2年 齋藤 優佳 「三十八年目の芽乃の願い」
北海道教育大学 3年 奥山 理美 「平和への歩み」

附属釧路中学校

北海道教育大学 2年 高橋 伶奈 「二人の墓標」を読んで

附属釧路中学校

●平成13年

第14回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 景雲中学校 3年 山内 恵理 「折り鶴の少女」をよんで

北海道教育大学 3年 高橋 伶奈 「林京子の「記録」をよんで

附属釧路中学校

北海道教育大学 1年 土田 心 「お星様のレール」をよんで

附属釧路中学校

●平成14年

第15回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北中学校 2年 尾崎 真澄 「まず、話し合いから」

北海道教育大学 2年 前川 千玲 「折り鶴の少女」を読んで

附属釧路中学校

北海道教育大学 3年 中谷 梨紗 「ヒロシマ 語り部の歌」を読んで

附属釧路中学校

●平成15年

第16回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 2年 大嶋 杏奈 「ヒロシマのいのちの歌」を読んで

附属釧路中学校

北海道教育大学 2年 米澤 紗綾 「ふたりのイーダ」を読んで

附属釧路中学校

共栄中学校 2年 河原 みさ 「広島之母たちを読んで」

●平成16年

第17回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 2年 藤井 沙織 「長崎の鐘」を読んで

附属釧路中学校

幣舞中学校 2年 島元 奈々美 「原爆体験記」を読んで

北海道教育大学 3年 大嶋 杏奈 「本当に大切なものを守るために「広島姉妹」を読んで

附属釧路中学校

●平成17年

第18回 平和図書読書感想文コンクール



最優秀賞	北海道教育大学	3年	藤井 沙織	「まっ黒なおべんとういしぶみ」を読んで
	附属釧路中学校			
	北 中 学 校	2年	大越 美穂	「飛べ！千羽づる」を読んで
	北 中 学 校	2年	高橋 瑞穂	「折り鶴の子どもたち」を読んで

●平成18年

第19回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	北海道教育大学	3年	小西 由姫	「真実を見つめて～夏の花から～「夏の花」
	附属釧路中学校			を読んで」
	北 中 学 校	2年	舘下 芽里	「戦争一人を狂わせるもの「夏の花」を読ん
				で」
	北 中 学 校	2年	角田 幸子	「青い空ではなかったあの日「原爆詩集にんげ
				んをかえせ」を読んで」

●平成19年

第20回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	北海道教育大学	3年	永塚 真子	「戦争の恐怖から学ぶこと「黒い雨」を読んで」
	附属釧路中学校			
	共栄中学校	2年	木下 琴海	「広島、長崎からの伝言「広島、長崎からの
				伝言」を読んで」
	北海道教育大学	1年	山下 裕太郎	「サダコ「原爆の子の像の物語」を読んで」
	附属釧路中学校			

●平成20年

第21回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	共栄中学校	2年	菊地 加奈子	「いのちの重さ「広島・長崎からの伝言」を読んで」
	北 中 学 校	2年	松岡 明日香	「今、私達にできること「原爆災害ーヒロシ
				マ・ナガサキ」を読んで」

●平成21年

第22回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	幣舞中学校	3年	三崎 愛美	「平和な未来のために「ヒロシマ あの時、原
				爆投下は止められた」を読んで」

●平成22年

第23回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	阿寒中学校	1年	大森 ともな	「戦争と子どもたち」より 1.戦火の中の
				日々を読んで」

●平成23年

第24回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 2年 小酒井 みお 「「原爆で死んだ級友たち」を読んで」
附属釧路中学校

●平成24年

第25回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 阿 寒 中 学 校 3年 大森 ともな 「「父と暮せば」を読んで」

●平成25年

第26回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 3年 鈴木 晴 菜 「戦争の記憶」
附属釧路中学校

●平成26年

第27回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 大 楽 毛 中 学 校 2年 黒 田 春 陽 「空襲、原爆、そして戦争のことで思ったこと」

●平成27年

第28回 平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞 北海道教育大学 3年 諫 山 莉 奈 「すぐそこにある幸せ」
附属釧路中学校



釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第29回 平成28年度 最優秀賞 北海道教育大学附属釧路中学校 2年 樋渡 羽奏

戦禍に学ぶ

いつもと変わらない日常の中で突然、自分の目の前に閃光が走ったら……。映し出されたら……。不安になるのだろうか？

その場に立ちすくんでしまうのだろうか？

絶望のどん底に落ちていくのだろうか？

その瞬間、全てが変わってしまった。その瞬間から悲しみと悪夢が始まった。

私は、被爆体験記を幾度も読んだことがある。一瞬にしていつも見てきた景色や風景、自分のおかれている状況が一変した。混乱と苦痛。助けたいが見捨てなければならない命。自分が生きていくのに精一杯だったとどの本にも記されていた。本を読んでいるだけでも背中に寒気が走った。辛かった。怖かった。かわいそうだった。

しかし、今回手にしたこの本は、作者の視点が違っていた。自分が被爆し、自らもけがを負いながらも医者という立場を優先し、他者の治療にあたっていた。首がない人、性別もわからない程皮膚がめくれていた人、苦痛を訴えた後に命を失った人。顔が黒く焼け焦げ損傷があまりにも酷く、服に縫い付けられた名前で身元を確認した程だったそうだ。パニックに陥っている人も多中で、平常心を保ちながら行動していた作者。自分の命を守らなければならないはず、守りたいはずなのにも関わらず、患者を最優先に診察している勇ましさ。医者としての使命感がそうさせたと思うと、胸が熱くなる想いだった。まさに、医療の戦場だと思った。

原爆の投下。いわゆる相手の見えない戦場だっただろう。そんな過酷な状況の中で体が弱り、生きる気力が無くなりつつある人に、医者として人間として手を差し伸べてくれる人がいたからこそ、安心感と共に生きよう、生きなければならないという想いが湧き上がったと思う。きっと心強かったことだろう。どんな苦境に立たされたとしても、助け合おうとする人間の神髄に触れたような気がする。一方、スマホで他人の悲劇を撮影し、投稿することが当たり前のように行われている今の世相とは全く違っている。他人任せではなく自分がやらなくてはならないと必死になっていたことと思う。

私がもし作者の立場であったなら、負傷者を助けることができるだろうか？いや、今の私には到底できない。その状況を見ているだけでも生きている心地がしないのではないかと思う。想像するだけでも怖い。心がすさむ。自分から進んで他人を助けることは難しいだろう。そう考えると「医者」として、いや、「一人の人間」として誇りを持って生きていくということの大切さを改めて感じさせられた。また、「人を助ける」ということは簡単なようだが、いかにそれが難しく勇気のいるものであるかを考えさせられた。

原爆は一瞬にして何千、何万もの人の命を奪った。生まれたばかりの赤ちゃんもいただろう。未来に向かって努力をしていた人も大勢いただろう。私の両親や祖父母のように、自分の子や孫の明日を夢見ていた人の命、その人たちの夢までも奪ってしまったのだ。

原子を核として使ってしまったがために悲しい出来事が起きてしまった。原子は人殺しの道具ではない。使い方を変えれば、レントゲン写真にも使うことが出来る。命の重みを改めて考えると、一つ一つがかけがえのないものであり決して無駄にしてはならないと心から感じた。

今、世界が「核の廃絶」に向かって動きだしているという報道に接する。わが日本国だけが唯一の被爆国であり、今もなお、被爆者とその家族たちは苦しんでいる。七十一年前の、あの一瞬にして起こった悲劇を決して繰り返したくはない。繰り返してはならないのだ。平和な国、そして平和な世界をだれもが願っているはずだ。

私は、今年の冬に宿泊研修で長崎を訪れる予定だ。戦争については新聞やテレビでしか見たことはないが、その際には原爆の恐ろしさをこの目で、この耳で、この体で確かめて来たい。また、しっかりと七十一年前の悲劇を学んでこよう。何の罪もないのに命を失った人たちが生きていた証を目に焼き付けてこよう。そして、原爆の爪痕を心に刻んでこよう。

戦後半世紀以上も経過し、戦争当時の恐怖や不安を心と体で感じ、当時のことを知る人が少なくなっている。だからこそ、戦争を知らない私達が、様々な視点で戦争体験談に耳を傾け、後世へと語り継いでいかななくてはならない。いや、その義務が私達にはある。それこそが今、私にできる「平和づくり」への第一歩でないかと考えているからだ。

戦争で亡くなった人達の死と被害にあった人たちの苦しい思いを絶対に無駄にしないためにも…。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第 30 回 平成 29 年度 最優秀賞 北海道教育大学附属釧路中学校 3 年 樋渡 羽奏

同じ轍を踏まないために

「戦争放棄。」この言葉をどれほどの人が重く受け止めているだろうか。日本の敗戦後に施行された日本国憲法は、今年で70年という節目を迎えた。一瞬にして奪われた尊い命。そして、悲しみや痛み、苦しみを抱えながら当時を生き抜いた人達の苦悩が、この第九条に託されているように思う。

「生きること、」「生き延びたこと」そして「生きていかななくてはならないと思うこと」このことが被爆してしまった人たちにとっての試練であり、自分との闘いであつたのではないかと何度も心を打たれた。被爆した人たちの苦しみが、心に突き刺さった瞬間だった。

昨年、とても貴重な機会が訪れた。宿泊研修で長崎を訪問した際に、被爆体験談を初めて、しかも直に聞くことができた。心が凍り付くほどの衝撃を受けた。「活字」だけでの知識とは違い、語られる言葉の一つ一つが心にしみた。それまでは本を読み、戦争当時の様子を、自分なりに想像していただけだった。

淡淡と語られる戦争体験談は、私が考えていた何千倍、何万倍、いや数字には表すこともできないほどの不安と恐怖に満ちていた。その生の声を聞き、まだまだ当時のことを知らなかった自分を恥じた。

私たちには明日がある。明日が見える。買い物に行こう、本を読もう、旅行に行こう。たくさんのプランを思い浮かべることができる。現在＝「平和」なのだ。被爆した人たちの声を綴ったこの本には明日が見えて奮闘した人、明日が来ないのではないかと不安に陥っていた人。明日を見失ってしまい、自ら命を絶ってしまった人。明日が来なかった人。壮絶な歴史が綴られていた。

たくさんの人が亡くなっていく姿を目にした脅威。何度も夢を見たり、思い出したり、苦しい思いをしたことだろう。それは自分の目の前にいた人を助けることができなかった「無念さ」があったからだと思う。もし、私がその場にいたとしても手を差し伸べる勇気や余裕は沸かなかったこと



だろう。負傷者や死者の残虐な姿が今でも目に焼きつけられている悲惨な状況だったことを知れば知るほど怖い。体の傷は少しずつ癒されるかもしれないが心の傷は一生なくなることはない。

生死の境をさまよい、後遺症を抱え苦しんだ辛さもあっただろう。辛かったのは、原爆を投下されたその瞬間だけではない。変わり果てた姿に街中で石を投げつけられ、傷ついた人もいる。仕事か思うようにできず悔しさでいっぱいだった人もいたことだろう。被爆した当人やその子供。そして孫までもが幸せな結婚への道を閉ざされた時には、家族全員が落胆したのではないだろうか。長崎が地元だということだけで被爆者扱いされた。まさに、風評被害であり、被爆者とその周りの人々との関係が崩壊するほど、核とは恐いものであるということを痛感した。

この本を読んで感銘を受けたのは、取材に応じた人たちの心の強さにあった。廃墟から立ち上がったたり、悲しい思いを持ちながらも、たくましさを持っていた。そのことは、亡くなってしまった人たちの無念な思いをバネに生きていかなくてはならないと決意したはずだからだ。だから、こうして思い出したくもない過去の惨劇を語ってくれたのだと思った。

歴史を変えることはできない。爪痕を消すこともできない。しかし、未来なら変えることができるかもしれない。二度と同じ過ちを繰り返さないように…。残念ながら、毎年戦争体験談を語ることのできる人たちの「命の灯」が、一つ一つ消えていっているという。多くの視点での戦争体験談に耳を傾け、戦争の苦しみ、悲しみ、恐怖を理解していかなくてはならない。たとえ、戦争を知ることが怖くなったとしても目を背けてはならない。真正面から立ち向かい、未来の平和という責任を果たさなくてはならないと考えているからだ。

科学は常に目覚ましい発展を遂げている。それとともに、私たちが平和で快適に暮らすために様々な開発が進んでいる。その中には人道支援や貧困に苦しむ国々の援助となっているものも確かにある。すべてが人々の幸福のために利用されているのであれば人類だけではなく、地球上のすべての生き物が平和に暮らしていけるのではないかと思う。

最近、「核の廃絶」という言葉をよく耳にする。しかしながら、いまだに核を保有している国がとても多いことも事実だ。核兵器は何に利用するのだろうか。世の中を平和にする基となるのだろうか。いや、むしろ傷つけることになるだろう。世界中を不安にさせるだろう。私たちの手で再び悲惨な戦禍を招かぬよう、また誤った道を歩まぬよう。まずは、私自身が本を読み、こうした戦争の脅威を身近な人に、話していきたいと考えている。

未来を担う私たちが同じ誤った道をたどらないように…。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第31回 平成30年度 最優秀賞 釧路市立桜が丘中学校 2年 中本 紅葉

私たちの未来のために

少女はなぜ強い心を持つことが出来たのだろうか。主人公の敏子は、東京大空襲で母と妹二人を亡くし、家族はバラバラになってしまった。その後やっと再会出来た父と、これから2人で一緒に暮らせるようになる。という矢先、目の前で父が銃撃で死んでしまった。父と暮らせるという明るい未来が、一瞬で絶望に変わったのだ。私と同じくらいの年齢の少女が一人で血だらけの遺体運び、周りの大人達の助けをかりてお葬式をあげる。戦争とは全く無関係な現代の日本に住んでいる私には、とうてい出来ないことだ。もし私だったら、おろおろと立ち尽くし、ただ泣いているだけ

だったと思う。

敏子が強く生きることができたのは、家族がいたからだ。生きるのがつらい。死んだ方が楽。海の向こうの敵に対して怒りがわいた。「死んで家族のもとに行こう。」そう考えて海に入ったが、思いとどまることが出来た。それは家族の顔が浮かんだからだ。「家族のために生きよう。」そう思った時から、敏子は強くなったと思う。まだ世の中のことをあまり知らない子供にとって、一番身近な存在は家族だ。敏子は家族を心の支えにして生き続けた。本能的に、「生きなければいけない。」と感じたのだと思う。

そして、敏子が生き残ったことにはきっと意味があると思った。なぜなら敏子はこの本を書き、多くの人に戦争の悲惨さを伝えたからだ。あの時子供の敏子が死を選ばなくて、本当に良かったと思う。

今の私は、本当に戦争と無関係なのだろうか。私は毎日、温かいご飯を食べ、制服を着て学校に行く。寒いときは暖かいコートを着られるし、暑いときは涼しい服装になれる。そして甘いおやつも食べるし、住む家もある。今あたり前に平和に暮らしているのは過去の戦争の上に成り立っているのだと思う。敏子が体験した戦争。その戦争に敗戦したことによって、定められた（戦争の放棄）敏子にとって、第九条の文面は、輝く太陽のようにまぶしく見えたらしい。私が初めて第九条を読んだ時、正直何が書いてあるのか意味が理解できなかった。戦争を経験していない私にとって戦争は遠い過去のできごとであり、授業で習ったりするだけで実感がわかない。でも、私に未来がある限りそれではだめだということも分かる。知らないからといって知らんぷりをするのではなく、自ら知ろうとしなければいけないと思う。この本を読まなければ、色々と考えたりしなかった。「第九条」についても、何も考えなかったように思う。

私は歴史を学ぶことについての考え方が変わった。今までの歴史の授業などでは、これを学んで一体何に役に立つのだろうと思っていたが、過去のできごとを学ぶことは、これからの未来をより良い平和な世の中にしていくために、私達にとって必要なものであると思う。自分の国に起こったことを学び、理解し、二度と同じまちがいをくり返さないように憲法第九条を大切に守っていくことが、戦争を体験した人達と、きちんと向き合うことにもつながると思う。

私達には未来がある。歴史がある。私には何かを変えるような大きなことは出来ないけれど、二度と戦争が起きない世の中になるようにたくさん本を読み起こったできごとを忘れないようにして、将来子供に説明できるようになりたいと思う。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第 32 回 平成 31 年度 最優秀賞 北海道教育大学附属釧路中学校 3 年 五堂 叶惟

明日も

「また明日ね。」

友達とあたり前のように交わす何気ない一言が、平和を意味している言葉だと初めて気が付きました。明日も会おう。そう誓うこの言葉は、とても希望があり、

「私たちは、明日も必ず生きて会えるだろう。」

「私達には、明日がある。」

そんな、今の時代を生きる私たちにだからこそ、口に出して言うことのできる言葉の意味が込めら



れています。

しかし、戦争という時代には、明日という言葉も、生きるという言葉も、会うという言葉すらも存在していませんでした。未来という時間軸など、無かったということです。

あなたの描く未来は、何色に光り輝いていますか。あなたの描く未来には、どんな光が差し込んでいますか。希望の色に染まっていますか。

一九四五年八月六日。あの日、あの時、あの場所に落ちた、一つの大きな光は、光り輝くこともなく、希望の色に染めることもなく、ただ、広島という町を、懸命に生きていた人々を、「絶望」という闇へ連れていくだけでした。

私は今回、満員電車で原爆を浴び、それでもなんとかあの時代を生き抜いた一人の少年のお話を読みました。母も妹も、祖父も祖母も、みんな彼の前から消え、彼に残ったものは、つらい後遺症だけ。その少年は言いました。

「もう死んだほうがましや。はよ死にたい。」

明日は生きていられるのだろうか。どうにか明日も生きていたい。不安や恐怖と共に、毎日必死に生きていた人間が、被爆し、心も体もボロボロにして、口から出す言葉は、

「死にたい。」

ただ、それだけでした。

もう戦争はしない。もう、核兵器は使わない。こんな言葉を、今に誓ったところで、戦争で苦しみ、原爆で苦しみ、消えていった命の数は、もう変わることはありません。なのになぜ、私たちは、もう戦争はしない、と誓うのでしょうか。その答えは、もう二度と、絶対にあのような悲劇を、過ちを、犯さないためです。これ以上、戦争によって、原爆によって消えていく命を、増やさないためです。戦争で苦しみ、原爆で苦しみ、消えていった命の数は、「変わらない」のではなく、「変えてはいけない」命の数なのです。

原爆は恐ろしいから使わないのか。原爆は危険だから使わないのか。原爆は、街を破壊するから使わないのか。いいえ。原爆は、人を殺すから、使ってはいけません。人が死ぬから、使ってはいけません。

こんな、子どもでもわかることを、あの時代の大人たちは、どうしてやめられなかったのでしょうか。私は、不思議で、不思議でたまりません。

日本という国のステータスには、こんなものがあります。「世界で、唯一の、被爆国。」世界でたった一つしかない、国のステータス。でも私は、こんなステータスのある日本という国に生まれたことを、嫌だとか、恥ずかしいだとか、そんな風に思ったこと、一度もありません。むしろ、日本人として、この国に生まれたことを、とても誇りに思っています。なぜなら、平和の尊さについて、根拠を持ち、世界の人々へ伝えられる権利を持っているように感じるからです。

少年は語りました。

「ぼくは地獄というのを見たことがないし、それがどんなところか考えたこともなかった。あとになって、この日の広島のような、多くの人たちが、地獄だったとか地獄絵だとか言った。ぼくも、あれは地獄だった、と確信するようになった。」

誰もが地獄だと言った、あの頃の日本の姿は、今は目に見えません。今の日本には、戦後、ずっと守り続けてきた、平和があります。

被爆国である、というステータスを持ったこの国に生まれた私たちは、その言葉の意味や重さを

理解し、これから生きる未来へつないでいかなくてははいけません。

明日も生きたいと願う人がいました。明日もあの子に会いたいと願う人がいました。叶わなかったその願い。もう叶えることのできないその願い。

でも、今の日本には、今日も生きている人がいます。今日も明日という日を約束している人達がいいます。

「また明日ね。」

友達とあたり前のように交わす何気ない一言が、こんなにもわかりやすく平和を意味しているすてきな言葉だと、初めて気が付きました。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第33回 令和2年度 最優秀賞 釧路市立景雲中学校 2年 高山 果恋

燃える広島の地で

終戦という「平和」のため、彼女たちは命という犠牲をなぜ払わなければいけなかったのか。原爆により、轟々と燃えさかる広島で被爆し、亡くなった級友の事を想いつづった関千枝子さんの著書『広島第二県女二年西組 原爆で死んだ級友たち』を一ページページめくる度に私はこの気持ちが強く実を結んでいるのを感じた。ましてや、戦争と正面から向き合う彼女たちは何を求めているのだろうか。

一九四五年八月六日八時、二年西組の生徒たちは建物疎開作業として野外で瓦運びを行っていた。現在の中学二年生にあたる彼女らは「ハイ」「ハイ」と持ち前の元気なかけ声と共に迅速なスピードで瓦を積み上げていく。積み上げた瓦を背に笑顔を浮かべている彼女たちの姿が浮び、このまま時間が過ぎて欲しいと私は強く願った。何事も無かったかのように。私はページをめくり、次の行へ恐る恐る目を走らせた。

「あっBが・・・」彼女たちの頭上にはB29から放たれたパラシュートがゆらゆらと落下していた。パラシュートには私たちがよく知っている原子爆弾がついていた。優雅に落ちてくる爆弾には自責の念など私には感じられない。そして、

「八時十五分。閃光と轟音。広島は死の街となった。」

爆風に吹き飛ばされた彼女たちは皆、大火傷をおっていた。火の海と化した広島で身体からむけおちたどろどろの皮膚を引きずり、顔を血で染めた彼女たちの足は慌てることなく火の無い方へ向かっている。変わり果てた彼女たちの姿は痛々しく、それ故に戦争に対する闘志で燃えていたのだろう。そこから、彼女たちは小集団となり病院や学校へと向かう。しかし、先程まで明るかった広島は真暗闇になり視界がきかなく、一、二キロメートルという僅かな距離で被爆した彼女たちは、重篤のため途中で力尽きた者、自力で病院や学校へたどり着いた者など様々であった。そして、この日を境に一人を除き、全員が二週間以内に昏睡に陥り他界した。この日、作業に参加せず生き残った生徒は関さんを含め六人のみ。広島第二県女二年西組は軽傷のため生き残った一人を含め七人となった。

惨い形でこの世を去った彼女たちは最後に何を思ったのか。ずっと信じて疑わなかった日本を初めて憎いと思ったのだろうか。だが、私の考えはすぐに打ち砕かれた。ほぼ昏睡状態に陥った彼女たちの大半が国歌を歌い、“日本は必ず勝つ。負けはしない。”と信じ死んでいったという。まさし



く彼女たちが求めたものは戦争に対しての自由ではなく、戦争に対しての勝利だと結論づけた。私と同じ中学二年生の女の子が亡くなる間際でこのようなことを思っていたのか。戦争から七十五年後の今を生きる私にとって彼女たちの存在は一生忘れないだろう。

彼女たちが生きた日々は決して「平和」であったとは言えない。それでも彼女たちは戦争に勇敢に立ち向い、原爆という「人間につくられたもの」により亡くなった。地震などの自然災害ではなく「人間につくられたもの」によって。私はこの事実に気づいた時、思わず叫びたくなった。「平和」の代償を負わせたのは誰かと。

彼女たちと比べ、私たちはどうだろう。今の「平和」な時代に甘えきってはいないか。技術が発達し、現代では十分なほど何でも可能だ。でも、私はこの本を反芻する度にこのままでは駄目ではないか、亡くなった命を無駄にしないかと思う。そこにはいつも

「戦争をよく知ってもらいたい。未来につなげて欲しい。」

という関さんの願望があった。私は関さんの思いがつまったバトンを受け取った。私は受け取ったバトンを未来へつなげたい。つなげた先には「理想の平和」があるのではないだろうか。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第34回 令和3年度 最優秀賞 北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 樋渡 俊翔

「戦禍の事実は体験談にあり」

「日本の勝利のためなら、自らの命を投げ出してでも戦う」と、戦地に赴くことを志願する若者がいた時代だった。悲しい別れのはずだが「バンザイ」と日本兵として国のために戦うことをたたえられた。「生きることを放棄するのに、『何がバンザイ』だ」と思ったが、当時は、それが当然のごとく国民に浸透していたのではないかと私は考えている。それは、当時の大日本帝国憲法が根底にあり、天皇が絶対だったからだ。平成生まれの私に到底理解のできない話だ。

戦争体験が記されたこの本で、当時を幅広く知ることができたように感じている。被爆体験者は、一瞬で家族や友達、未来までも奪われた。変わり果てた街並みや、真っ黒に焼け焦げた人や皮がずりむけた人々の様子。地面が遺体で散乱していたことなど、その恐怖から何度もフラッシュバックしたに違いない。それほどあの日の出来事は、衝撃的だったはずだからだ。今、こうして当時の惨状を、この体験談を読んでいる私たちに、克明に伝えようとする熱い思いが伝わってきた。言葉と写真から想像する戦禍の様子が生々しく感じられたのは、当時の様子が正確に伝わってきた証拠だろう。

以前、長崎や広島を訪れた姉からも、当時の惨劇についての語り部の話や現地で見たことを教えてもらったことがある。原爆資料館では、溶けた瓶同士がくっついていたり焼け焦げた自転車が展示されていたこと。広島の平和慰霊式では、気温が38度もあるにも関わらず、たくさんの方が参列していたこと。中には、そのためだけに訪れた外国の人もたくさんいたという。それほど、世界中の人々の心の中に原爆を投下された日のことが刻まれていることを知った。真実を伝えることの重みが身に染みた。

当初、被爆者は日本人だけだと思っていた。しかし、日本軍の捕虜となったオランダ兵もいたことを知った。長崎で辛い労働を強いられ、日本語が話せないと暴力をうけるような差別もあった。その過酷さから仲間が次々と死んでいった。一方で、原爆投下によって、怪我をした日本兵を助け

るなど、人類が平等であるという考え方を持った人がいることを目の当たりにした。つらい思いをしたのは、決して日本人だけではなかったからだ。

長く続いた戦争の中から得たものは何もない。原爆投下によりさらなる悲しみのスパイラルが続く。放射能の影響でハイヒールがはけなかったり、死んで半焼けになった父親を置き去りにし、ずっと後悔の念にかられた人。被爆2世だからと、結婚をあきらめた人など。目に見えない敵との闘いと、体と心に負った後遺症は、とてつもなく大きい。

辛いのは戦時中だけではなく。戦後は、経済の再生にも時間を要するほど、日本列島は疲弊していた。その中で、アメリカ兵が日本の子供たちに食べ物を与えていたという事実には驚いた。「捕虜になっても命が一番だ」という日本兵とは真逆の考え方を持ったアメリカ兵が見た日本人の粗末な姿から、敵も味方も関係ないと思える様子を感じとられた。

また、日本も少しずつ変化を遂げていた。最初に述べた憲法が、日本国憲法として生まれ変わり、王権が天皇から国民に。さらには、第9条の戦争放棄を条文に加えることにより、平和な未来を約束したのだ。当時を生きてきた人々は、どれほど安心しただろうか。どれほどの明るい未来を思い描くことができただろうか。

戦争は、人々を不幸にする。狂わす。身近な人を失い、路頭に迷うことだってある。食料難で栄養失調になってしまうほどだ。そんな「戦争」というものが人間にとって必要なものなのだろうか。絶対に必要ではないと誰もが感じているはずだ。ただ、戦争を体験せず、戦争体験談にも耳を傾けずに生きて行けば、どうになってしまうのだろうか。戦争という人々を不幸にする行為について、安易に考えてしまうこともあるだろう。今回のように平和図書読書感想文コンクールが無ければ、「ナガサキノート」を手にし、読破することだってなかっただろう。世界唯一の長崎や広島に被爆地を訪れたことのない私にとって、当時を知ることができたことは大きな学びとなった。将来、被爆地を訪れ、当時について深く知り得たいと思っている。私が知らないだけで、まだまだ戦争には秘められた「事実」があるのではないかという気がするからだ。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第35回 令和4年度 最優秀賞 北海道教育大学附属釧路義務教育学校 8年 青戸 愛唯

今の私たちがいるのは…

ubiquitous（ユビキタス）という言葉はラテン語で「神はどこにでも存在する」という意味を持っている。これは英語の先生が好きな単語で、私の興味を惹かれた言葉でもある。しかし、この作文を書いているときにふと思った。神がいるというのなら、なぜ戦争は起きてしまうのだろうか。神様は、私たちが平和に暮らすことを望んでいないのだろうか。

昭和20年八月六日午前八時十五分。神様は日本に残虐な試練を与えた。アメリカで開発された原子爆弾が投下されたのだ。当時広島市にいた三十五万人のうち推定十四万人。続けて八月九日午前十一時二分。長崎市にいた二十四万人のうち七万人近くが亡くなった。

私はそのように悲惨な「第二次世界大戦」の出来事を聞くと、一番最初に『焼き場に立つ少年』という題名の写真を思い浮かべる。その写真は、占領軍として長崎に入ったジョー・オダネルさんが、軍のきまりを破ってまで撮影したというものだ。その行動には、自分の国のしたことが正義ではない、という強い思いがあったという。アメリカが日本に原子爆弾を落とした



こと、かつて日本の敵国であったことは揺らがない事実だ。しかし、本当に敵国の国民全てが敵であると言い切れるだろうか。私は自信を持って違う、と言えると思う。なぜなら、彼のように自国に反発し、「二度と酷い戦争を繰り返してはならない」という考えを広めようとした人が、世界には大勢いると思うからだ。

私が読んだのは『いしぶみ 広島二中一年生 全滅の記録』だ。建物の解体作業をしていた、広島第二中学校の一年生三百二十一人、そして四人の先生が一人残らず亡くなったことが記されている。たった一瞬で子供の夢が失われた。逃げ遅れて煙に飲み込まれた人、親のもとに戻るができず道の途中で息絶えた人…。この本を初めて読んだとき、罪のない人が無差別に殺されてしまったことに、やり場のない悲しみを覚えると同時に、原子爆弾を恐ろしいと感じた。

私は『いしぶみ』を読み、さらに戦争について知りたくなった。そこで『平和のバトン—広島の高中生たちが描いた八月六日の記憶』という本を読んだ。こちらは、戦後に生まれた広島の高中生が、実際に被爆した人の記憶を聞きながら絵を完成させる物語だ。語り部のように「声」で表現するのではなく、「声」として聞いたものを「形」として届ける。形は違えど、後世に歴史を伝えていく。その心がけを大切にしていけばいいと思った。

私の曾祖父は戦時中、敵の襲撃から逃げようとしたことがあるそうだ。脚には爆撃の破片が刺さった痕が残っていたという。しかし、曾祖父はその体験を誰にも話したくないと言っていたと、母に聞いた。戦争を知らない私たちは、争う人の気持ちも、家族が家に戻らなかった人の気持ちも、想像でしか知ることができない。どうして戦争をするのかも、わからないままだ。

歴史に詳しい国語の先生が見せてくださった『釧路空襲』からは、約六千人が争いに巻き込まれ、さらには「釧路一面が焼け野原」だったという詳しい様子が窺えた。釧路が被害を受けた要因は、港や鉄道が栄えていたこと、工場が多かったことが関係していると言われている。市民は何もかもが灰色になった無常さに、涙も出なかったという。壕から出る際に倒れ、人々の下敷きとなって亡くなった姉弟の話。爆風で飛ばされた赤ん坊の話が特に印象に残った。家族がいる・家がある・ご飯が食べられる…そして何より、明日がやってくることが今よりもっと、当たり前ではない世界だったことを痛感した。この三冊の本を読むまで、こんなに知らないことがあったのか、とも。

私のように、戦後に生まれた人が戦争を知らない理由は「社会の授業で習ったから、なんとなく知っている」ということにあると、私は思っている。「知った」ことで満足してしまい、それ以上深くは知ろうとしないのであろう。過去にあった出来事も、「歴史」という便利な言葉に片付けられてしまう。教科書に載っているからという理由で戦争を見てはならない。戦争に巻き込まれた人も、過去にあった残酷な戦争がこのように扱われてしまうことを望んではないと思う。私は戦争について知ってからずっと、疑問を持っている。力で制圧しても沢山の犠牲をうむことにしか繋がらない。誰も得をしない。なのに、なぜ人は争いをするのだろう。人の命を無駄にしないで解決する方法はないのだろうか。

平和を創っていくために今の私たちにできることは、命懸けで国を守ってくれた先人たちに感謝しながら、生きていくこと。平和が当たり前であると思いつまないこと。戦争から目を背けず、記憶を語り継いでいくこと。同じ争いが起こるのを防いでいくこと。そして、限りある

命を大切にすることだ。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第36回 令和5年度 最優秀賞 釧路市立青陵中学校 2年 澁谷 茉奈

あの日の空の色

『空は今 何色ですか あの日と同じように』

山崎朋子作詞作曲の合唱曲『空は今』はこう始まる。私達の学級は昨年の合唱祭でこの曲を選んだ。合唱練習の始めに、音楽の先生からこの曲が長崎の原爆に寄せて作られたということを知った。歴史で習ったこととしては知っていたが永井隆先生の存在や、「あの日」青かったはずの空で何が起きたのかはなんとなくしか知らなかった。

そこで私はこの『長崎の鐘』という本を読んだ。この本は「被爆体験記録」として、当時長崎医科大学に勤めていた永井先生が遺したものだ。読んでみて、まずは想像を絶する被害に驚いた。

『まるでこの世のものとは思われぬ』

投下直後の様子として文中で永井先生もこう述べているように、身元もわからず原形すらとどめていない無念の死を遂げた人々、水を求める焼けた人々であふれかえった「あの日」の街は、今私が想像している何倍も何倍もむごかったのだろうと思う。第二次世界大戦での核兵器の使用、日本が唯一の被爆国であること。ひとつの「過去」としてノートに板書を写していた自分の捉え方がいかにぬるく甘かったのか、「あの日」のことだけでなく「戦争」自体をただただ知った気になっていただけなんだと思い知った。

『器械はあと回し。人間を救い出そう』

この永井先生の言葉から受けたのは、あの時代を生き抜いた人々の強さだ。例えば救護を行う医療隊。自分が無傷で元気だから手当している訳ではない、だれかが救わなければいけないのだ。どれだけつらくても自分達の役割を全うし、支え合って懸命に生きようとする人々と、合唱曲『空は今』の歌詞が重なった。

『ここで生きているんだ ここで生きていくんだ 希望が 明日を照らしている 今』

今日一日を生き延びるのも大変だった状況からだんだんと原子爆弾の実態が明らかになり、さらには原子病についても声をあげる永井先生達医師の姿や、この地で生きようとする全ての人の志。今までは「戦争」と聞くと、昔起こったかわいそうな話、「悲劇」などという印象の方が大きかった。しかし、この「悲劇」をただの「悲劇」で終わらせてはいけない、「生きていくんだ」と固く決意をした人々の存在と抱いた希望を、忘れてはいけないと今では強く思う。

昭和二十年八月九日は快晴無風。いつもと変わらない朝を迎えた。造船所や製鋼所、兵器製造工場などが集まる日本軍の重要都市である長崎に原子爆弾が投下されたのは十一時二分。七万人を超える人々が無残にも命を落とした。

現在、原爆落下中心地には世界恒久平和への願いを込めた平和公園がある。その中には被爆者の霊へ水を捧げる平和の泉、亡くなった方々の冥福を祈る長崎の鐘、市民の願いを象徴する平和記念像などが設けられている。像の台座の裏には「右手は原爆を示し、左手は平和を、顔



は戦争犠牲者の冥福を祈る」と作者の言葉が刻まれた。

原爆の脅威に立ち向かい、明日への希望を持ち続けた人々。平和を願い犠牲者の冥福を祈る
暇。そしてあの日の空の色も私達は全て伝え続けていかなければいけない。

書 名：「長崎の鐘」（著 者：永井 隆）

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第37回 令和6年度 最優秀賞 北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 澤谷 彩

戦争の終り

私はこの本を読んで思った。まだ戦ってる人はいると。

私が読んだ本は井伏鱒二の「黒い雨」という本だ。この本にした理由は作者が同じ「山椒
魚」という本を読んで面白く他の名作も読んでみたくなったからだ。

あらすじは、主人公閑間重松の姪の矢須子の縁談が八月九日に被爆した原爆患者ではないか
という噂があり決まらないという話から始まり、重松は矢須子の身体が健康であることを見合
い相手に証明するために当時のことを記録した日記の清書を始めてゆくという話だ。日記の清
書をする現在と日記の中の過去を行き来する形になっている。

黒い雨とは原爆の投下後に降る、爆発時に舞い上がった泥、すす、ほこり、放射性物質を含
んだ粘り気のある大粒の雨のことである。小説内でも矢須子が黒い雨に打たれ水で洗っても落
ちない描写がある。この雨は原爆の二次被害のようなもので喉の渇きから雨を口にしたり、雨
に打たれ数日は元気に過ごせていたにもかかわらず、突然死亡する人も多かったそうだ。

私がこの本を読んで感じたことは二つある。一つ目は何もわからないことの怖さ。二つ目は
戦争に終わりはないということ。

一つ目に感じたこと理由は広島の人々が原爆のことを「ピカドン」と呼んでいたからだ。
ピカドンという名前は先にピカと光り、後にドーンという轟音が聞こえるからだそうだ。他に
も日記の中で主人公は「人間の目をつぶす有毒爆弾」ではないかと判断していた。自分がその
ものについて何も知らないとな様々な予測を立ててしまう。身体に有毒なものではないか、周り
の空気も有毒になるのではないかと、人を媒介して感染するのではないかと。近年、新しい感
染症の新型コロナウイルスが世界的に流行ったが、そのときもある食べ物を食べると感染しな
くなるなどという噂が流れ様々なお店からその食べ物がなくなってしまったこともあった。噂
が多数の人がそう発言しているだけで私たちも簡単に信じてしまう。発言する側も受け取る側
も気をつけなくてはならない。この本でも矢須子が原爆患者だといい、重松夫妻が秘し隠して
いるという話が出ているが全くの噂である。

二つ目の戦争に終わりはないと感じたのは物語に出てくる様々な人物が原爆による後遺症に
苦しんでいる描写があったからである。戦争を始めることは簡単かもしれないが戦争を終わら
すことは簡単ではない。戦争が終わって安心するかもしれないが、戦争で犠牲になった人々、
後遺症を患った人々に対する悲慘な気持ちで立ち直れないでいた人もいたかもしれない。広島
の中心的な街も被爆を受けて復旧するのにたくさんの年月がかかったことだろう。他にも様々
な被害があったと思われるが、今も戦争で苦しんでいる人がいるという事実は変わらない。

私はこの本を読んでいる途中に読むのをやめてしまいたくなる時があった。それは原爆が投下されて直後の場面で生々しく、鮮明に書かれていたからである。投下された後、人々がどのような格好をしていたのか、どのような精神状態にあったのか、建物はどうなっていたのか。正直、今の私たちの生活からでは考えられないような風景だったにちがいない。しかし、そのようなことが実際に起こったのだ。このような想像を絶する場面の中で特に印象に残ったのは重松、妻、矢須子が駅に辿りつき動いている満員電車で割り込んで入ったとき、重松は狭苦しかったので鼻の先にある婦人の荷物を肩でおし、違和感を感じ手で触てみると人間の耳だった。重松は婦人に「お子さんですか」と尋ねると「そうです。死んでいるのです。」と答え重松はおしたことを謝り婦人は「お互いさまです」と答え俯いたと思うと発作を起こしたように泣き出した場面だ。この場面は物語としてはそこまで重要な場面ではないが私には印象に残った。このような戦争で無罪な無関係な市民が、しかも未来のある数多くの子供達も亡くなっている。広島原爆投下で亡くなった人は約十四万人、その中で九歳までの子供は約七万人だそう。約半分が子供で私はこの情報を知ったとき心が痛んだ。一つの原子爆弾で何万人という人の命を奪えることも知った。

私はこの本を読む前、原爆について詳しいことは何も知らなかった。しかし、この本を読んで原爆の恐ろしさについて知ることができた。そして目を背いてはいけない悲劇であることも知った。さらに原爆による後遺で苦しんでいる人がいる。戦っている人はまだたくさんいる。原爆の被害について知るだけでも私はその人たちの力になれると信じている。世界で唯一、原子爆弾の被爆国に生まれた私たちはこのようなことが二度と起きないように忘れないことが私たちには大事なのではないか。

書 名：「黒い雨」（著 者：井伏 鱒二）

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第 38 回 令和 7 年度 最優秀賞 北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9 年 山瀬 一太郎

語り継ぐ惨禍

「原爆」・「戦争」それは果てしなく未来へと繋がる悲しみの足跡であり、誰もが知るべき繰り返しを許さぬ誓い。

はだしのゲン「わたしの遺書」を読んで私は原子爆弾の恐ろしさと、戦後を生き抜こうとする人々の強さについて深く考えさせられた。この作品は、広島に原子爆弾が投下された直後の悲惨な状況の下、主人公のゲン（著者である中沢啓二さん）が絶望的でどん底の中でも生きる力を見出し、平和の大切さを訴えている。また、原子爆弾によって一瞬の内に命を奪われた人々や残された者たちがどれだけの痛みを受けたのか、更にその後の復興に向けた人々の奮闘を描いている。

まず、私には作品を通じて何度も強く感じた事が二つある。

一つ目は原子爆弾の恐ろしさである。ゲンが爆心地近くで見た風景は、想像を絶するものであった。「地獄」という言葉さえ生ぬるく思える描写が続いていく。焼けただれた皮膚が垂れ下がり、水を求めて彷徨う人々の姿は、読者である私の胸に深く突き刺さった。



二つ目は、戦争をする事の無意味さだ。作中にこんなセリフがあった。「水をくれ…。」これは被爆した人々が口にする最後の願いであり、その切実さと無力感が作品全体に重くのしかかっている。命の象徴である水が、死の寸前でさえ与えられない現実には戦争の非人間性を改めて感じた。更に、たとえ被弾を逃れ生き延びたとしても、被爆者にはひどい後遺症が残る。放射線による影響は目に見えず病と化し、長く苦しむ人々が数多くいる。作者の母親もまた、後遺症に苦しんだ一人である。母親の死後、遺体を火葬すると、遺族が拾える骨はほとんど無いほどであった。生きている人間の骨に侵入し、食い尽くし、スカスカにしてしまう放射線とは本当に恐ろしいものである。戦争はその瞬間だけではなく、その後も人々の生活を永遠に蝕み続けるのだと痛感した。

「人間はこんな事をしてはいけない。」という言葉も印象深かった。原子爆弾を投下した側がどんな意図を持っていたのか、そしてその結果として全く罪のない数えきれない人々の命が奪われた事を考えると、戦争の恐ろしさに言葉を失ってしまう。このように多くの命が奪われた事は、戦争を忘れてはならない理由の一つだと強く感じた。

しかし、この作品の中で描かれているのは単なる悲劇だけではない。ゲンは、絶望的な状況の中でも決して希望を失わず、前向きに生きようとしていた。父親が戦争に反対して逮捕されたり、兄弟を失ったりする中でも、「生きるんだ。」というゲンの強い決意が何度も繰り返されるのだ。この言葉に私は力強さと人間の可能性を感じた。たとえどんなに過酷な状況に置かれたとしても、人は未来を切り開く力を持っているのだというメッセージがまさに伝わってくる。これは、今後の私たちが大切にすべき心の在り方だと思う。

この作品は、単に戦争の悲惨さや原子爆弾の恐ろしさを描くだけではなく、命の大切さや生きる力の強さをも教えてくれる作品である。私たちが今、どれだけ幸せな環境に生きているか。そして、原子爆弾のような恐ろしい兵器が二度と使われぬよう、戦争のない平和な世界を築くために、私たちがどのような行動をとるべきなのかを考えさせてくれた。また最近では、「日本被団協」がノーベル平和賞を受賞し、核廃絶に向けた動きが強まっているが、持続可能なエネルギーとの両立も求められている。

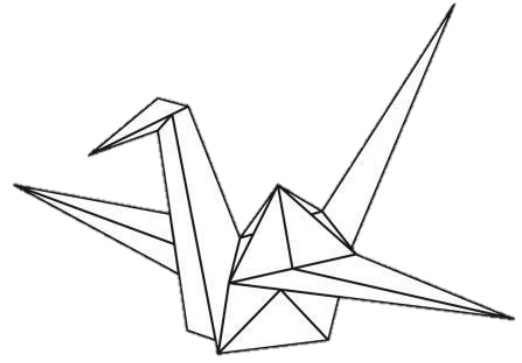
広島や長崎での経験は、核兵器の使用による人類への脅威を強く印象付けている。その一方で、エネルギー問題の解決策として原子力発電を取り入れる必要性も現代社会では生じている。

しかし、現在は核兵器と同じ技術が人々の生活に不可欠になっているのも事実である。一見すると、核＝根絶、原子力＝有効利用は矛盾していることのようにも思える。しかし、核兵器の廃絶とエネルギーの持続可能性を両立させる方法を考えていく事も、今後の課題の一つだと私は思う。

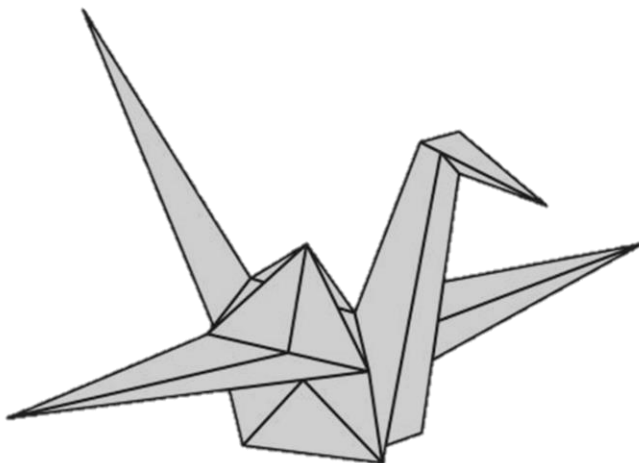
そして、もう一つ、今も世界各国で起きている戦争。これらの事を自分たちがどう考えて、具体的にどのように取り組み、どう発信していくかがとても重要になってくると思う。

私も、これから社会に出た時、核問題やエネルギー問題、そして、人々が戦争の無い平和で安定した暮らしが出来るようになるためには一体何が必要なのかを真剣に考えていきたい。それは、私たち使命でもあると思う。

書 名：はだしのゲン「わたしの遺書」（著 者：中沢 啓治）



平和コンクール
平和の主張コンクール（高校生）



歴代最優秀賞受賞者

●平成14年

第1回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路工業高等学校 2年 森 優圭 「平和とは」

●平成15年

第2回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路西高等学校 3年 西 菜都子 「未来にはきっと」

●平成16年

第3回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路湖陵高等学校 2年 冨塚 博子 「人間でありたいから」

●平成17年

第4回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路湖陵高等学校 1年 大嶋 杏奈 「人として想うこと」

●平成18年

第5回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路湖陵高等学校 2年 西山 千尋 「悲しみの連鎖」

●平成19年

第6回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路江南高等学校 3年 三日市 憲治 「戦争の事を未来に引き継ぐ」

●平成20年

第7回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路湖陵高等学校 2年 本間 花菜 「「平和」とは」

●平成21年

第8回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路江南高等学校 3年 利部 若奈 「平和への一歩」

●平成22年

第9回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路湖陵高等学校 2年 亀岡 勇紀 「『真の平和を』」



●平成23年

第10回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路湖陵高等学校 3年 亀岡 勇紀 「愛の反対は」

●平成24年

第11回 平和の主張コンクール

最優秀賞 武修館高等学校 1年 山田 健裕 「ヒロシマに学ぶ」

●平成25年

第12回 平和の主張コンクール

最優秀賞 武修館高等学校 2年 山田 健裕 「共に生きる」

●平成26年

第13回 平和の主張コンクール

最優秀賞 釧路湖陵高等学校 2年 西宮 琴美 「平和のために」

●平成27年

第14回 平和の主張コンクール

最優秀賞 武修館高等学校 3年 飯塚 杏菜 「平和のために日本人ができること」

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第15回 平成28年度 最優秀賞 武修館高等学校 3年 吉田 怜未

今を生きる私たちの課題と責任

大きな銃を持ったまだ幼い少年。兵士に頭を銃で突きつけられている無表情な少女。片手に銃を持ちながら幼い子どもを抱いて歩いている母親。大きな穴が開いた黒板で授業をしている教室。笑って銃を持っている子ども達。どの写真も今の日本では見たことがない光景で私の心にぐさりと突き刺さった。悲しみと同時に戦争への怒りがこみ上げてきた。

「戦争は恐ろしいものだ」というのは小学生の頃から歴史の授業などで習ってはいた。しかし戦争のない今の日本に生まれ育った私は戦争というものがどれほど悲惨で恐ろしく残酷なものなのかわからない。しかし、この戦場の写真は世界の現状を多く物語っているように思えた。多くの写真に共通していることがある。それは、ほとんどの子どもが武器を持っているということだ。日本でなら幼稚園や小学校に通い勉強をしたり、好きなことをして遊んだりしているはずの年齢の子ども達が大きな鉄の塊を持って大人に混じりながら生きるために戦っているのだ。果たしてこの子ども達はどのような大人になるのだろうか。命の重さを知った大人になるのだろうか。私が戦争のない日々を当たり前のように過ごしているのと同じで彼らも争い合う日常を当たり前のように過ごしている。そう考えると「平和」という単語が幻想的な言葉に聞こえてくる。

人間は長い地球の歴史の中で多く争い、多くの血と涙を流してきた。その形跡は目に見える形で残されていたり、人々の心に癒えない傷跡として深く刻まれている。いつの時代も人間を傷つけるのは人間だ。それは昔も今も変わらないのだと思う。誰かの名誉やプライドのためだけに起きる戦争や宗教同士の派閥から起きる戦争、国家間の政治的争いから起きる戦争など様々な理由から戦争は起きてしまう。どの争いも人間同士が傷つけ合い多くの犠牲を出す。今、私がこうしている間にも世界のどこかで恐怖とともに戦火のなり止まない日々を過ごしている人々がいる。生きるために人の命を奪っている人々がいる。もし今、私が暮らしているこの場所が戦場で、生きるために戦わなければならなかったら、私は人の命を簡単に奪う人間になってしまうのかもしれない。という恐ろしい光景が頭に浮かんだ。生きている境遇が違っただけで人は変わってしまう。それが人間の恐ろしいところだ。

先ほども述べたように、私は戦争を知らずに育った。当時の状況や心境は私が想像している以上のものなのかもしれない。

北方四島のひとつである国後島は祖母の故郷だ。終戦を迎えソ連に占拠され、引き揚げ命令が出るまでの数年間、厳しい監視の下で恐怖の日々を送っていた話などたくさん聞き、自分の身近に戦争があったのだと祖母を通して知ることができた。四島返還は祖母を含めた元島民の願いであり希望である。私にはこの貴重な生の声を伝えていく責任があると感じた。それと同時に戦争のない今を生きていることがいかにありがたいかを実感した。

戦争のない今の日本に生まれ育った私たちが平和のために何をすべきか。

それは、戦争や核兵器の恐ろしさを後世に伝えること。この先、戦争体験者の高齢化が進み減っていつてしまう。つまり生の声を聞ける機会が減っていくということだ。核兵器や戦争の恐ろしさを私たちは体験したことがない。だが、平和を願った人々の思いを受け継ぐことは出来る。もう二度と日本を含め、世界各国どこにも黒い雨を降らせてはいけぬ。そのためにも核の廃絶を世界に



発信していかなければならない。

そして、平和の尊さを噛みしめて生きること。「平和とはなんですか」そう聞かれると少し戸惑ってしまうかもしれないが「人々が自分らしい生き方をして、幸せを追い求めていけること」と私は答える。学校にも行ける、帰る場所がある、そして自分の未来を描くことができる。

人は平和を求める。だが、人類は罪や過ちを繰り返してしまう。争いのない今の日本に生まれた私たちができることは二度と同じ過ちを繰り返さないようにすること。

「戦争」を生み出したのは人間である。そして「武器」をつくったのも人間。だが、国や人を守るのは「武器」ではない。「権力」でもない。国や人を守るのは「人間」なのだ。過去は変えることはできないが未来なら少しずつでも変えることができる。争いからは大きな犠牲や苦しみや悲しみといったマイナスのエネルギーしか生まれない。そのすべてを奪う争いは今日も終わりを告げない。癒えることなく残る傷跡を忘れてはいけない。争いのない日々が本来の姿であるということを私たちが伝えていかなければならない。それが今を生きる私たちの大きな課題であり責任なのだと思う。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第16回 平成29年度 最優秀賞 北海道釧路北陽高等学校 2年 田口 さくら

私が考える平和

私は、このコンクールに応募するまで、平和について考えたことはあまりありませんでした。一体どのようなことを「平和」というのかは、人それぞれ考えがあると思います。

私自身、釧路の歴史について知らないことが多いので、インターネットで調べてみました。釧路が空爆されたのは、昭和二十年七月十四日の午前五時頃だったそうです。釧路空襲を実際に体験した佐藤昌之さんのお話によると、「訓練なら、最初に警戒警報でサイレンが一回なって、敵機来襲でサイレンが三回なるというはずが、突然の三回のサイレン。まもなくグラマン戦闘機が釧路の現在の日本製紙のあたりと市街地を空爆した。旭町で火の手があがり、その後、たくさんの町を焼き尽くした。恐る恐る外に出ても、すぐに第二波、第三波の空襲があり、やっと外に出られたのは翌日だった。外は一面焼け野原が広がっていた。」とたくさんの辛い体験を語っていました。釧路空襲の写真を見ると、辺り一面が焼けて、真っ黒な黒煙がたくさん立ち上り、見るも無残な光景が広がっていました。

現代でも北朝鮮のミサイルや、核兵器が消えないなどの問題が多くみられます。戦争が絶対に起きないわけでも、一生戦争に関わらないわけでもありません。現代に戦争を実際に体験した方がいるのですから、私たちは戦争と共に生きていくと言っても過言ではないのだと思います。

しかし、何故核兵器はこの世から消えないのでしょうか。世界でおよそ十ヶ国が核を持っていて、日本もその疑いがあるそうですが、非核三原則と言いながら核兵器禁止条約には不参加だそうです。本当に、「戦争」という恐しい現実を繰り返さないという気はあるのか不安です。核兵器とは、原子爆弾や水素爆弾など強大な破壊力を持つ爆弾のことで、ウランやプルトニウムなどの原子核が分裂する時に巨大なエネルギーを引き起こして爆発するという、まさに絶望をつくりだす兵器です。すさまじい爆風で建物や人間をふきとばし、とてつもない高温の熱線で人間を一瞬で焼き溶かし、

放射線をあびた人々の体の細胞が壊され、病気や後遺症をわずらいました。こんなにも恐しい兵器を持っている国がある、と考えただけでもゾッとします。

私たちは戦争の悲劇を忘れてはいけません。亡くなった方や後遺症をわずらいながらも懸命に生きた方、戦争を体験し、後世に語り継いでいく方。たくさんの人の気持ちを大切にしましょう。私たちはお互い助け合わなければ生きていけません。同じ人間同士で争い破壊し合っても誰も得しません。何も生まれません。人々がお互いに助け合い、笑顔でいられること。毎日おいしいご飯が食べられ、ぐっすり眠ることができること。学校へ行って友達と話して笑ったり、たくさんのことを学べること。外で元気に遊んだり走ったりできること。私たちが、今、普通にできる、普通に過ごしていることに感謝するべきだと思います。そして、普通に生きていられることが「平和」なのだと私は思います。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第17回 平成30年度 最優秀賞 北海道釧路湖陵高等学校 1年 樋渡 羽奏

平和への想い

「平和」について問い、考えさせられる機会は多々ある。小学生の頃は「楽しい生活を送ることが平和だ」と考えていた。中学生になると戦争体験記を読んだり、長崎の地を訪れたり、戦争と向き合うことが多くあった。「当時を知り、二度と同じような戦禍を招かぬようにしていくことが平和への道しるべだ」と思うようになった。

しかし、恒久平和を掲げる我が日本と平和維持に取り組んでいる世界各国でさえも平和とは言えない状況であることも確かだ。

今、私がこうして原稿用紙と向き合い、筆を取っていただけることも平和の一つだと思う。「ペンではなく、銃を持っているアフリカの子供たち」という言葉をよく耳にする。本来ならば、学校で勉強をしなくてはならない私とほぼ同年代の青年たちが勉学ではなく戦争に従事している。そのほかにも、飢餓によって苦しむ人、テロによって危険にさらされている人…。私たちが考える「日常」さえも「至極当然」ではない人が多数いるのだ。だがテレビや新聞等でこのような痛ましい報道に接しても、残念ながら現実が起こっている出来事だと認識しにくいのも事実だ。それは、「平和大国日本」で生活をし、ましてや危険と隣り合わせの生活などの経験自体が無いからに他ならない。

しかし、そんな日本にも昨年、深刻な出来事が起こった。二度も北朝鮮のミサイルが日本上空を通過したことである。早朝に流れていたその速報に身震いがした。「今この瞬間にミサイルが落ちてきたらどうになってしまうのか」「私の人生は今日で終わってしまうのか」「明日以降の予定をこなすことができなくなるのか」と恐怖の狭間にいる自分がいた。それと同時に、七十三年前の日本では多くの人たちが毎日のように、このような思いをしていたのだとも実感した。

戦争の脅威。私は、中学二年の修学旅行で長崎を訪問した際に、原爆記念館に足を運んだ。そこで目にしたのは、七十三年前の「現実」だった。あの瞬間からずっと動かない時計。高温で溶けて複数がくっついたガラス瓶。痛々しく、生々しい、数々の写真。背中が凍り付くほどの衝撃を覚えた。戦争のすさまじさが自然と目に焼き付いた。

新聞や本などの活字からだけでは想像することができない情景がそこにはあった。過去にあった



一つの事実を受け止め切れていなかった自分を恥じた。また、復興を遂げた現在の街並みからは戦争の爪痕はうかがえなかったということも、衝撃を更に大きくしたのだろう。私があ時代のあの場所にいたならばどんな人生を歩んでいたのだろうか。強い思いを持って、立ち直ることができたのだろうか。いや、そのような勇氣はわからないだろう。食糧や衣服、燃料など生活必需品でさえも入手不能な生活。戦争に勝つまでの辛抱だと、どれだけ苦しくても耐え続ける日々。人々の泣き叫ぶ声や、人間とは思えないほどの残虐な姿に私は耐えることができないだろう。悲しみや恐怖を乗り越えようと必死に現実と戦い続けた当時の人たちの心の強さを感じた。

戦争体験者の高齢化により、戦争を知る人が年々減っている。過去の惨劇を知るということに少なからず恐怖はある。私も実際に戦争体験談を聞くまではそうだった。ただ、過去の事実を知らなければ将来の日本において、同じ過ちを犯してしまうことも否定できない。戦争で亡くなってしまった人の尊い命を無駄にしないために、体験談に耳を傾けていく必要があるのではないかと考える。

「歴史は繰り返される」というが、このことだけは二度と繰り返してはならない。誰もが肝に銘じて生きていかなくてはならない。世界には七十億の人がいる。国や地域によって言語、生活様式など慣習自体も違うのだから、時に意見がぶつかることがあってもおかしくない。自国の、国際社会における立場を守ることも外交を行っていく上では大切なことだが、歩み寄ることも必要だろう。

今、私たち日本人が戦禍から遠くかけ離れた生活を送ることができているのは、憲法第九条があるからだと思う。戦争からの数年間で平和について様々な議論がなされたはずだ。その結果「先人が政治的解決として武力行使を選択したことは正しくはなかった」そう認識したから存在している条文だ。だからこそ、時代が変わっても「九条」は守っていく必要がある。いや、その義務が私たちに課せられている。日本の未来を担っているのは私たち若い世代だ。私は、二年後に選挙権を得ることになる。参政権を持つ一人となる。その際には、日本はもちろん世界に住むすべての人が平和に生活できるように汗を流してくれる候補者を選びたい。未来の平和を願って一票を投じたい。無念な思いを抱いたまま亡くなってしまった人たちに恥じぬよう、これからも「平和」であることを切に願い、後世へと語り継いでいくことが使命であると考えてる。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第 18 回 平成 31 年（令和元年）度 最優秀賞 北海道釧路湖陵高等学校 2 年 樋渡 羽奏

我々が堅持すべき平和

「国の内外、天地とも平和が達成される」という願いが込められた「平成」も終わりを告げた。振り返れば、日朝首脳会談や現職アメリカ大統領の広島初訪問などに、日本中が歓喜に沸いた三十一年間だったと思う。それとは裏腹に、同時多発テロや北朝鮮のミサイル発射など武力や暴力の行使も少なくなかった。戦争のない世の中になっても痛ましく残虐な行為は根絶されないということが悲しくてならない。

私は、生きていることこそが最高の平和であると考えている。生きているから家族や友人と会話を楽しむことができる。明日への希望を持つことができる。日常を送ることができる。一方、七十四年前の日本はどうだ。原爆の投下により家族、住居、夢をも奪われ「生きる」だけで精一杯だった。一瞬で大勢の人が亡くなった。一命はとりとめたものの心身に深い傷を負い、苦しんだ人もい

た。また、一度に家族を亡くし孤独を感じた人もいた。「生きられる」ということが至極当然となっている今だからこそ「生きる」という信念を貫いていく風潮や意思も大切であると考える。

昨年、広島市で行われた慰霊式に参列する貴重な機会を頂いた。その日は三十八度を超える猛暑だった。私は、あの暑さを今でも忘れることはできない。七十四年前のあの日は何倍、何十倍と熱く、苦しかったはずだからだ。原爆が投下された同日同時刻には約五万人が参列した。その中に多くの外国人がいたことに大変驚かされた。犠牲者を追悼するための長い列を見て、日本国外でも原爆の恐ろしさは風化していないこと、関心を寄せて犠牲者を悼んでくれていることに日本人の一人として心からの感謝の念を抱いた。これからも日本が、そして世界中が戦争のない平和な世で在り続けてほしいとも同時に願っていた。

先日、戦没者の遺骨のDNA鑑定にまつわる投書記事を目にした。「遺骨が兄弟のものかを特定できなかったことに無念さを感じた」という内容だった。半世紀以上も前に終結した戦争だが、被爆者や遺族の心の中での戦いは未だに終結していない事にも無念さが残る。

「日本は平和ボケしている」と言われているが私は結構なことだと思っている。むしろ誉め言葉ととらえている。

しかし、平和な世の中を維持するためには莫大なエネルギーが必要だ。外交上の会談では必ず意見のぶつかり合いがあるからだ。常に円滑な話し合いなど存在しない。自国の経済発展、ひいては国の発展に必要不可欠な問題についての話し合いの場だからだ。話が断裂し、国同士の間に亀裂が入ると味方となってくれそうな国を探し、団結する。その瞬間から決裂した国は相手国に対し制裁を加え始める。今は武力こそ使われてはいないが、いつ行使されてもおかしくはないのが現実だ。妥協ばかりすべきとは思わないが、互いに協力できる関係を築くことが外交の本来あるべき姿であろう。

戦争当時は、国益を守るために武力を使うことに多くの国民が賛同した。ところが、たくさんの犠牲者が出る中で「戦争という外交問題の解決の手段は間違えていた。」ということに気づいたからこそ今の日本がある。平和大国と呼ばれる日本がここにあるのだ。

戦争のほとんどは外交問題から始まる。それは約一万年以上前から変わらない。だからこそ、戦後の政権には戦争を体験した政治家が必ず入閣してきたのではないかな。しかし、時代は流れ、戦争を知る政治家も減っていることに不安を感じる。戦争を知らない人たちだけで日本を築いていくことを想像するだけで恐怖を感じる。同じ過ちを繰り返してしまう可能性も否めないからだ。このような事態に陥らないためにも、私たち若い世代が戦争の残酷さについて理解をしておくことが何よりも大切だ。有権者という立場で選挙を通じ、社会を背負っていくことで私たちにも未来の日本に迫る危険を阻止することができるはずだ。ただ、世の中を動かすことができる年齢になってから急に戦争について理解を深めても意味がない。当時の苦悩、悲惨さ、体の痛みを心から感じることは一朝一夕には難しいと考えるためだ。

日本の歴史上に「戦争」という事実があったと知った時から、その痛みに触れておく必要がある。戦争を二度と繰り返さないためにも、過去の過ちから目をそむけてはならない。世界中で戦禍について語り継がれていくことこそが、戦争で苦しんだ人たちへの報いになるのではないかと考えるからだ。

令和の時代を未来への希望と共に生きていくためにも、私たちの手で恒久平和への道を切り開いていこうではないか。



釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第19回 令和2年度 最優秀賞 北海道釧路湖陵高等学校 3年 樋渡 羽奏

時代とともに移りゆく未来

平和とはなんだ。小学生低学年の頃からこの問いの答えを探し求めてきた。その過程で私が出会った本や人、訪れた被爆地の広島と長崎は、私の平和に対する思いを大きく変えた。戦争体験談を聞いたり、被爆したものを目の当たりにし、様々な視点で思いを巡らせてきたつもりだ。

さて、現代の社会は平和といえるだろうか。核の廃絶が進んでいないことはさることながら、内戦やテロの武力による危険にさらされている人もいる。飢えに苦しんでいる人もいる。加えて、行き届いた十分な医療や安全な生活環境が整備されず、命を落とす人さえいるのが現状だ。平和は何らかの脅威や苦しみが完全に排除されて初めて成立するものではないのか。

今年の春、命の大切さを痛感させられた。新型コロナウイルスの流行のことである。日本ではまだ感染が確認されていなかったころ、他国で流行しているという報道に接しても、「対岸の火事」のようにしか思わなかった人がほとんどだった。「自分だけは大丈夫」という考えが多くの人命を奪った。協調の欠如から生まれた悲劇だろう。

一方で「共助」の精神がもたらした人間愛を新聞の投書で目にした。「バスに乗車していると、その中でただ一人、マスクを着けていない高齢の女性がいた。そこで自分が持っていた三枚のマスクをあげたところその女性は涙を流して喜んでいた。」マスク不足が深刻化していたご時世で、見ず知らずの人に譲るには大変な「勇気」を必要としたと思う。それでも自分の身に対する感染の懸念よりも善意が勝ったのだろう。心の強さとその勇気に震撼した。人間の神髄に触れたような気がした。それと同時に、本来動物や人間には、助け合おうとする本能が備わっている。だから、手を差し伸べられた瞬間、「頑張ろう」という意欲が沸き、明日への活力にもつながっていくとも思った。このスパイラルこそが、社会的な共助の輪を広げていく一つのルートなのではないだろうか。

このような篤行も少なからずある。だが一方で核の開発は今も尚進んでいる。いくら声を上げてても開発が中止される確率はゼロに等しいということが悲しくてならない。核開発推進派が唱える核抑止論があることはわかっている。しかし、本当にこの理論は通用するのだろうか。私はしないと思う。自国の安全や国益が危ぶまれたとき、皆、平常心を保つことができなくなると考えるからだ。取り決め通りに事を進められないことも十分にある。貿易摩擦や外交上の意見の相違により、その関係に亀裂が入ることも珍しくはない。歩み寄ったかと思えば急にけん制し合う。核開発すら、国同士での競争化が激化している側面も否めない。核兵器がなくなる限り、核戦争の可能性は十二分にあると考える。戦争の最大の抑止力は核の保有ではなく、核の完全なる廃絶だ。

今からほんの七十五年前、日本に四日間で二度も原爆が投下され、何十万という尊い命が失われたという過去は覆すことができない。いくら愚かな行為を恥じててもその事実は変えられない。失われた命も戻ってこない。現代日本のように「戦争」という同じ過ちを後悔するような未来は望まない。むしろ、一般国民に核開発を阻止することができるような力もない。しかし、こうして今、生命を授けられている私たちが、あの悲惨な戦禍を見聞し、語り継いでいくことで、世論の大半を反戦争派へと導いていくことができるかもしれない。

しかし、現実には戦争体験者の減少や高齢化により、当時の生の声を聞く機会が失われつつある。より一層、与えられる機会を可能な限り無駄にせぬ意識を持つ必要がある。その際には、語り部たちは常に戦争を想起する度にその心を痛めていることも胸に止めておかななくてはならない。自分たちが味わった血の滲むような辛い思いが脳裏をよぎり、その振動さえもが聞き手に伝わるほどだったからだ。今を生きる私たちには同じ思いをさせたくはない、という強い意思があるからこそ、伝承してくださっている。その想いに報いるためにも、私たちは一つ一つの言葉を深く受け止め、心に刻み、未来へそのバトンを繋いでいかなくてはならない。それは、我々に課された責務でもある。

私にとって、釧路市が主催するこのコンクールは、戦争の忌まわしさと恒久平和の尊さ、そして、それを語り継ぐ義務を考える一つのきっかけだった。残念ながら応募の機会は今年で最後となってしまった。しかし、世界中の人が「平和な世の中だ」と思い続けられることの重要性はいくら歳を重ねても心に止めておきたいと考えている。むしろ学びを深めていきたい。たくさんの人たちによって日本はもちろん、世界にも未来へ向けてこのバトンが受け継がれていくことを切に願っていく。未来の明暗を分けるのは私たちだからだ。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第20回 令和3年度 最優秀賞 北海道釧路江南高等学校 1年 藤澤 輝煌

戦争について考え、理解する

「平和」と聞くと真っ先に戦争が思い浮ぶ。平和の意味を調べると「戦争や暴力で社会が乱れていない状態」と書かれていた。では、今日の日本はどうだろう。世界的に見ても平和な国と言えるが世界には今もなお、紛争や内戦が続いている国はある。日本も近隣の国との領土問題が時々取り上げられることもあるが辛い深刻になってはいない。だがそれでよいのか。自国だけでなく世界全体としての平和を求めているかなければならない。そして、一人一人が考えていかなくてはならない。

なぜ、戦争は起きるのか。領土や資源の争い。互いに異なる民族、宗教を信じる者同士のぶつかり合い。つまり、利害の不一致や意見の相違から生じる。どちらかが攻めてきたら応戦せざるを得ない。やはり戦争は止められないものなのか。だが、決して戦争を肯定してよい理由はない。なぜなら、人が死ぬからだ。

僕達高校生が戦争について考える時間は、はっきり言って少ない。終戦の日である八月十五日。社会の歴史の時間などが挙げられる。多いと言えるだろうか。戦争を経験した方が周りにいれば話を聞く機会があるがなかなかない。これでは世代を重ねるごとに、戦争に対しての意識や恐怖心が風化していつてしまう。なので、学校で積極的に戦争について考える機会を作っていつてもらいたい。

かく言う僕も本格的に戦争について考え始めたのは、中学校2年生の時である。社会の時間に教材のDVDで戦争時の生活や戦いを見た。その時に衝撃を受けて家でも戦争関連の番組を予約して見るようになった。僕は戦争の知識や見聞が少ないが今まで見てきた映像の中でも特に二つ心に深く刺さったシーンを紹介したい。一つ目は、日本の植民地となった東南アジアで行われた日本語弁論大会という日本語でスピーチする大会で、ある少年が強く印象に残った。彼は、小学生ぐらいの歳で信じられないほど流暢な日本語を見せた。直接的に戦争の恐ろしさが伝わるシーンではない



が、よく考えてほしい。年端もいかない子どもが他国の言語を強いられているのだ。そこで彼が語っていたのは、日本への愛だ。自分が生まれた国への愛ではない。言語だけでなく文化や思想も染めてしまう。二つ目は、サイパン島での日本軍とアメリカ軍の戦いで、ある女性が映されたシーンだった。地上戦で民間人も巻き込まれて島の北端に追いつめられたのだ。その女性は崖から飛び降りて自殺した。もちろん、鮮明には映されなかったが一瞬、頭が真っ白になった。その崖では約一万の人が自殺したらしい。ただただ恐怖を覚えた。自殺するのは尋常ではない精神力を要する。しかし、その女性からは何の迷いもないように見えた。戦争はそこまで人を追いつめるのか。戦争は理性を失わせる。ショッキングなシーンだが、戦争の恐怖をわからせるには充分だった。「戦争は絶対にダメ」。頭で理解してるつもりでいたがこの映像を見てやっと確信に至ることができた。他にもたくさん紹介したいシーンは、あったが今回は少し変わった視点の戦争の恐怖を伝えたかった。

最後に僕が言いたいのは、二つ。「戦争をしてはいけないとわかっているつもりになっていないか？」そして、「僕達、高校生に何ができるのか？」について。「戦争をしてはいけないのは常識」。戦争を経験した国の中でも唯一の被爆国である日本国民は全員、そう教育されてきたと言っても過言ではない。常識であるからこそ深く考えようとしな。それでは本当の意味での理解はできていない。断言はできないがそういった人は、大勢いると思う。自分の立場になって考えてほしい。今日のようにお腹いっぱいご飯が食べられるのか。今、住んでいる家が明日もあるのか。隣にいた友達や家族が明日も隣にいるのか。戦争は日常を一瞬で壊してしまう。そんな戦争を起こさないために高校生ができることは何か。はっきり言って直接的に戦争を止めるためにできることは少ないと思う。それでは、一人一人ができて、かつ簡単にできることは何か。それは、「知る事と広める事」だと僕は思う。一人一人が戦争に対しての理解を深め、そこで知った事を周りに伝えていければ少しずつ人々の意識を変えることができると思う。知る方法はたくさんある。インターネットが普及している現代では誰でも情報を手に入れられる。それでもめんどろという人は、教科書をただめくって見るだけでもいいし、テレビで戦争について流れていたら少し耳を傾けるのもよい。そこで得た情報や意見を周りの人と共有する。そんな過程の中で戦争の恐怖を真の理解ができる人が増えてゆくことを願う。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第21回 令和4年度 最優秀賞 北海道釧路北陽高等学校 2年 高橋 和花

戦争のない世界へ

私は戦争反対です。理由がいくつかあるので書きたいと思います。

一つ目の理由は、多くの犠牲者が出るからです。今、爆弾が落ちてきたとします。そうすると、生まれたばかりの命も、必死で今を生きている人も、目標をかかげて生きている人も一瞬で亡くなります。実際、第二次世界大戦では、日本で三〇万人もの人々が亡くなっています。

二つ目の理由は、戦争は終戦してもそれだけでは終わらないからです。アメリカではこのようなことが起こっています。二〇〇一年に始まったアフガニスタンでの戦争と、二〇〇三年から始まったイラク戦争から、本国に戻った米兵たちを復帰軍人といいます。多くの兵士たちは

戦地で想像を絶するような試練を経験して帰国します。その中で「心的外傷後ストレス障害」を患う帰還兵も多いそうです。そういった障害を患い、自殺に追いこまれてしまうという人がいます。二〇一四年に発表によると、一日に二十二人が自殺しているそうです。単純に計算すると、一年に約八千人が自殺しているということになります。

ここで、ある一人の軍人の方の話を紹介します。ワシントン州に住んでいた、デリック・カークランドさんは高校卒業後米陸軍に入隊した。訓練を受けた後、イラクに派兵された。ある日、彼の所属する小隊が、テロリストのせん滅を目的とした作戦をイラクの小村で行うことになった。彼は、他の兵士たちと、ある民家のドアを打ち破り侵入した。侵入後、イラク人男性を撃った。男性は床には倒れたが、すぐに死亡したわけではなかった。小隊長がカークランドさんに「そいつの胸を踏みつけろ。そうすれば出血が加速して早く絶命する。」と命令した。カークランドさんは反論したものの、命令に従わざるをえなかった。この時の光景が彼の脳裏から消えることはなかった。その後、米国への帰還を許されたが再びイラク行きを命じられる。彼は戦場で精神を病み、再び米国に戻って陸軍病院にしばらく入院した。その時医師が「自殺する危険性は低いので、小隊に戻るべき」と判断を下し、三度目のイラク行きとなった。小隊に戻ると、小隊長が叱責した。カークランドさんはイラクで何度か自殺未遂事件を起こしたが、それでも任期を終えて、ワシントン州の自宅に戻った。だが精神状態は決して良いわけではなかった。母親に「僕は人殺しだ」とつぶやき、ふさぎこむ日が多くなった。精神科医のところに通ったが、最後は自宅の押し入れで首を吊った。二一歳だった。

この軍人の方のように、帰還しても精神を病み、自殺してしまう人がいます。戦争の影響はずっと続くのだと思います。終戦してもそれだけでは終わらないというのが戦争です。

私が戦争について調べている中で、一つ考えさせられたことがありました。「もしも今どこからミサイルがとんできて、自分の大切な人が無残に殺されてしまっても、戦争反対ということと言えるか？」ということです。戦争は起きないことが大切だと思っています。ですが、もし自分の大切な人が殺されてしまったら…。と考えると、「戦争反対！反撃なんてしてはいけない！」と言える自信がありません。もしかしたら、「反撃して、ミサイルを撃ってきた国にも同じ思いをさせてほしい」などと思ってしまうかもしれません。

現在、ウクライナでたくさんの人々が戦争によって亡くなっています。一日でも早く終わってほしいです。私は戦争は何があっても起きてはいけないと思います。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第22回 令和5年度 最優秀賞 北海道釧路北陽高等学校 3年 佐藤 改

平和のために

昨年2月、ロシアがウクライナへの侵攻を開始してからすでに一年が経過しました。

一ヶ月程度で終わるだろうと思われていたこの戦争は、誰も予想できないほど長引き、終わりの見えなくなっています。

このような事態になってしまった理由を調べてみると、政治的な対立や領土問題などさまざまな理由があることがわかりました。



しかし、私は第二次世界大戦という大きな戦争から七十五年以上という長い年月が経過し、悲惨な記憶が薄れてきていることも一つの要因なのではないかと思います。

戦争を経験した人の平均年齢は八十歳を超え、実際に戦った人は百歳を超える人も多く、私たちが大人になるころには、戦争の記憶を語りつぐ人がほとんどいなくなっているかもしれません。

太平洋戦争が終わってから今までの間、日本は一度も戦争をせず、とても平和な国になりました。しかし、かつてとても大きな戦争をして、さらに核兵器によって多くの人が亡くなり、現在も苦しんでいる人がいるということを忘れてはいけないと思います。

最近では北朝鮮のミサイルでJアラートが鳴ることが増えるなど、かつてあれほど悲惨なことがあり、現在も多くの人が核をなくさなければいけないと訴えているにもかかわらず、ニュースで見たり聞いたりする機会はとても増えているように感じます。

それに対して私たちは、唯一の被爆国として、核兵器の悲惨さを世界に向けて語り継いで行かなければいけないと思います。

私は戦争のつらさや核兵器について実際に経験したことはなく、詳しく知っているとも言えません。しかし歴史について調べたり祖父母など、実際に戦争を経験した人たちに聞くことはできます。自分一人だけで核兵器をなくすことはとても難しいですが、自分たちが昔なにかあったかを知ることが大事で、どのようなことがあったのかを忘れてしまわないようにしなければいけません。

私は中学生のとき、八月十五日に行われた釧路市民戦災死没者慰霊式に参加する機会があり、そこで花をかざったことがあります。子供の頃、なにも思わずにあそんでいた公園で、七十五年前に空襲があり、およそ二百人のかけがえのない命が犠牲になったという事実をこのときはじめて知りました。戦争はとても昔のことで、北海道は攻撃を受けていないと思っていたので、かつて釧路も空襲を受けていたことに強い衝撃を受けました。

日本は今とても平和で、私たちもなにひとつ不自由のない生活を送っています。しかし世界中のいろいろなところで戦争は続いていて、いつ日本がまきこまれるかもわかりません。

これからも平和に生きていくために、そして世界中が平和になるために私たちができることはすくなくはないですが、かつて何があったのかを知り、後の世代に伝えていくことで、戦争の悲惨さは語り継がれていき、いつの日か世界から戦いがなくなる日がくるかもしれません。この作文を通してさまざまなことを調べ、平和についての関心がとても深まったので、それをけして忘れないようにしなければいけないと思いました。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第23回 令和6年度 最優秀賞 北海道釧路湖陵高等学校 1年 青戸 愛唯

祈り続けること

釧路栄町平和公園の噴水や緑は、普段、私たちの癒しの場所として親しまれています。けれども、そこは昭和二〇年七月十四・十五日の釧路空襲で犠牲となった百九十三名の方々を弔う場所でもあります。

この日は厳島神社のお祭りが開催される予定でしたが、早朝から空襲警報が鳴り響き、お祭りは中止に。逃げ込んだ防空壕の中にも、飛び交う戦闘機の音が聞こえてきて、戦闘銃が厚い壁を突き破り襲ってきたそうです。恐怖の日から一か月、終戦の玉音放送を聴き、日本の敗戦に多くの人が涙を流し、釧路に徴兵されていた海軍達は竹老園で『残念会』をした後、それぞれの故郷へ帰っていったと言います。

兵士達は、戦争が終わったことを本当に残念だと思っていたのでしょうか。たくさんの建物が消失し、焼け野原に変わり果てた現実を目の当たりにして、どのような明日を思い描いていたのでしょうか。当時は敵だった米軍の兵士でさえ、空襲や原爆の悲惨さに戦争後遺症を患った人が少なくないそうです。この戦いは、勝ち負けではなく、多くの人々の心に深い傷を与えるものだったのではないのでしょうか。

「我は死なり、世界の破壊者なり。」これは、『原爆の父』と呼ばれた物理学者・オッペンハイマーが残した言葉です。彼は生前、科学技術の発展を目的とし、原子爆弾を自らの手で開発しました。しかしながら、そうして開発された爆弾は、アメリカ大統領・トルーマンの指示により、長崎・広島に投下され、膨大な被害を及ぼしました。オッペンハイマーは、日本の惨状を知って初めて、自分の生み出した核兵器が恐ろしいものであったと後悔したと言います。

戦争体験者は年々高齢化していて、語り継がれる機会が減少。北海道の被爆者協会は来年の春に解散することが決まったということです。このままでは、近い将来、戦争が『過去のこと』と忘れ去られてしまいそうです。私たちは、戦争を歴史として捉えるのではなく、常に平和を願い、安心して暮らせる世界をつくる心がけをしていくべきだと感じます。空襲のあった日、原爆が投下された日、終戦記念日だけが、平和のことを考える日であってはいけないのだと思います。今、普通の暮らしができていること。家族がいて、帰る場所があること…。自分の周りにあるもの全て、当たり前ではないことを知る必要があります。

戦争は、悲しい歴史を生むだけです。戦うことは、互いの人生を壊し、運命を狂わせ、心を蝕むだけだと思います。憎しみ合うのではなく支え合い、すべての人々が、核兵器ではなく「愛」を持てる世界であってほしいと祈り続けています。

釧路市平和都市推進委員会委員長賞

第24回 令和7年度 最優秀賞 北海道釧路湖陵高等学校 2年 青戸 愛唯

平和のメロディー

『平和への祈りは深く 紫の鶴を折る
野の果てに埋もれし人に 黄色い鶴折りたたみ
水底に沈みし人に 青色の鶴を折る』

これは、被爆から五十年を迎えた平成七年に「長崎を最後の被爆地に」という思いを込めて作られた合唱曲『千羽鶴』の歌詞の一部です。長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典にて、毎年大切に歌い継がれています。

私は、中学二年生のときに、釧路市被爆地訪問市民代表団の一員として、長崎で開催されている青少年ピースフォーラムに参加しました。その際、犠牲となられた方々のご冥福を祈り、



平和の実現を願って、仲間達と『千羽鶴』を歌いました。素敵な歌詞とメロディーに心を奪われました。今も、私はこの曲が大好きです。

長崎の地で、私は素敵な友達、そして、優しいピースボランティアの先輩方と出逢うことができました。平和について考えることができ、かけがえのない幸せな時間となりました。平和とは何か・争いをなくすためにはどうしたらいいのか、意見交流を行いました。実際に戦争を体験していない世代の私達に何ができるのか、簡単に答えを出すことは難しいですが、平和を願い、発信していくことに意味があるのではないかと考えます。

今年で日本は、戦後八十年を迎えます。戦争を経験した方々は段々と高齢化しており、かつての日本の悲惨な状況を直接知っている人は、急速に少なくなっているそうです。このままでは、想像もできないほど残酷で、悲しい出来事が「戦争」という単純な言葉で片付けられてしまうのではないかと、とても不安です。そこで、私は、学校の探求の時間で、平和の大切さを訴えかける活動を行おうと考えています。「平和で楽しい毎日を送るのが当たり前」と思っている今だからこそ、平和について考えるきっかけを作るべきであると考え、現在、準備を進めています。学生や大人のみならず、小さな子供たちにも「今」を過ごさせていることの素晴らしさを知ってもらいたいのです。楽しいことだけでなく、忘れてはならない過去の記憶を繋げていかななくてはならないと思います。今の私たちがあるのは、過去に、日本のために命を尽くしてくださった方々の努力があったからです。その事実をしっかりと心に留め、後世に伝えていきたいです。これからは、私たちの世代が、平和の尊さを世界に訴えかけていく時代であると強く感じています。

合唱曲『千羽鶴』の結びには『未来への希望と夢を 虹色の鶴に折る』とあります。もう二度と、日本、そして、世界に戦争が訪れてはなりません。

戦争によって奪われるのは、人々の命だけではありません。戦争を経験した人々も、これから先、戦争の歴史を知ることになる人々も、辛く、悲しい思いをして、心まで壊されてしまうのです。

未来で、私たちは「戦争」ではなく「平和」のことを考えられるようになって欲しいです。『千羽鶴』の歌のように、誰も悲しむことのない世界が早く訪れることを願ってやみません。

戦後80年 平和コンクール記念誌

令和7年8月15日 発行

釧路市平和都市推進委員会 編集

〒085-8505 釧路市黒金町7丁目5番地 釧路市市民環境部市民生活課内

